

## 幸福に関する主観説と客観説

江口 聡(京都女子大学)

心理学や経済学での幸福の研究が社会的にも注目されている。世界各国の人々の幸福度、人生満足度の比較などといった言葉が、メディアでとりあげられることも増えている。こうした分野の研究は、人々の生活における幸福感とそれに寄与している諸要因を明らかにし、また人々の生活をより幸福にする介入方法を探索しようとしている。しかし、こうした研究では基本的に「あなたは自分の人生に満足していますか?」のような質問と集計が行われるが、こうしたものが本当に我々が求めている「幸福」であるのかどうかは哲学的な検討の余地がある。哲学者は、「よい生活、望ましい生活」としての幸福(well-being)をどのようなものと理解するべきだろうか。こうした問いに対して、1980年代半ば以降、Parfit(1984)の快樂説、客観的リスト説、欲求充足説という三分法で議論されることが一般的である。

我々一般人の日常的な感覚では、幸福とは、おそらく、苦痛や苦悩に悩まされずに愉快で楽しい生活を送ることである。幸福な生活で重要なものは快樂と苦痛であるとする快樂説は古代ギリシア時代から、幸福の一つの解釈の候補となっている。快樂説によれば、ある人が幸福であるかどうかは当人が感じている感覚に依存することになる。他の人から見てどんな状態であれ、当人が楽しいと思っていればその人は幸福である。こうした主観的な立場に対しては古代から「豚の哲学」という汚名が着せられており、いまだにそうした懸念を表明する哲学者も少なくない。また、実際にも我々は低俗な快樂や不徳な快樂を避け、あえて苦痛と苦勞の多い活動や生活を選ぶこともあるように思われる。さらに、我々が求めているものはそもそも単なる感覚や意識状態なのかという大きな疑問がある。快樂説で重視されるのは、個人の経験であり感覚である。もし、思い通りの人生を送っていると思ひこむことのできる「経験機械」が存在したとしても多くの人はそうした機械に一生繋がれていたいとは思わないだろう。

もっと現実でありそうな例としては、自分の人生はまったく順調で、まわりの人々から愛されていると思いきんで満足しているが、実は配偶者にも子どもにも部下にも裏切られ馬鹿にされているという状態を、我々は幸福であると考えないだろう。

快樂説のような主観的な立場に対立する立場が、客観的リスト説と呼ばれる立場である。この立場では、人生には当人の主観的感覚を離れて、客観的に善といえる諸々の要素があり、それらを獲得することがよい人生であり幸福な人生である。ただし、この要素のリストに入るものを具体的に同定し、またその価値の優先順序を定めることは難しい。また、客観的なリストに入れられることの多い知恵や自由のような善は、当人の感じる快や喜びとは独立に、また当人がそれを欲求していなくとも当人にとって善であり幸福のために必要だとされねばならないわけだが、これはエリート主義・権威主義的に見える。さらには、リストに入れられる要素が善であることをどうやって知るか、それらの善がリストに記載されることになる理由を、単なる直観以上の仕方ですすことは難しい。こうした問題を考えれば、知識や愛や友情は、我々が求めるからこそ価値があるのだと主張したくなる。

快樂説と客観的リスト説の両方の難点を回避できる立場として、幸福とは我々の欲求の充足(実現)であるとする欲求充足説が注目されるようになった。快樂はそれ自体に価値があるのではなく、我々がそれを求めるからこそ価値がある。他の価値についても同様である。この立場は、メタ倫理学で有力な非認知主義と相性がよく、また人々が実際に行う選択という形で経済学的な計量と集計の土俵にのせやすいために人気を集めた。

しかし欲求充足説にも難点が多い。その難点の多くは、我々の欲求すべてが合理的であるとは限らないこと、我々の欲求が時間によって変化すること、そして我々は自分が経験しないことへの欲求をもつことがあるといった点にかかわるものである。各種の難点を避けるために、配慮する欲求に制限を加え、十分な情報を入手したのちに合理的である欲求が充足されることが重要なのであり、さらに、そのなかでも自分が経験する事柄に対する欲求こそが快樂にかかわる欲求であるとすることは可能だが、こうした立場はある種の快樂説に逆戻りしてしまい、快樂説と同様の反論にさらされることになりかねない。

こうした幸福に関する三派に分かれた論争は、欲求充足説自体には各種の難問にぶつかり次第に退潮するとともに、欲求説の長所を快樂説に取り込んだ折衷的な形のものが提案されることによって、快樂説対エウダイモニア説という形での主観説と客観説の対立になりつつある。この流れのなかで近年注目されているのがサムナーの人生満足説や、クリスプやフェルドマンの洗練された快樂説である。テーマレクチャーでは、こうした 90 年代以降の新しい考え方が、旧来の主観説に対する批判にどう答えているのかを検討したい。最後に、こうした福利と幸福の問題が、「人生の意味」という問題とどう関係するのかを考える。

### 参考文献

- Crisp, Roger (2006) *Reasons and the Good*, Oxford University Press.
- Feldman, Fred (2004) *Pleasure and the Good Life: Concerning the Nature, Varieties, and Plausibility of Hedonism*, Oxford University Press.
- (2010) *What is This Thing Called Happiness?*, Oxford University Press.
- Griffin, James (1986) *Well-Being: It's Meaning, Measurement, and Moral Importance*, Oxford University Press.
- Haybron, Daniel, M. (2008) *The Pursuit of Unhappiness: The Elusive Psychology of Well-Being*, Oxford University Press.
- (2013) *Happiness: A Very Short Introduction*, Oxford University Press.
- Parfit, Derek (1984) *Reasons and Persons*, Oxford University Press. (デレク・パーフィット, 『理由と人格：非人格性の倫理へ』, 森村進訳, 頸草書房, 1998).
- Sumner, L.W. (1996) *Welfare, Happiness & Ethics*, Oxford University Press.

